

Book
Land

無謀運転への憤りと寄り添う愛犬

『柴犬マイちゃんへ
の手紙』

柳原 三佳 著

講談社
1,260円

全国のどこかで日常的に起きている交通事故。毎日のように新聞やテレビのニュースで、死亡者、重軽傷者が報じられているが、その事故を境に、深く苦しい体と心の痛みに耐え、理不尽な現実と葛藤している被害者、そして遺族の方々がいる。

本書は交通事故問題をテーマに、小学校上級生以上向けに発刊されたノンフィクション。童話のテイストも織り込んで、子供から青少年が対象となっているが、事故の検証状

況、刑罰なども詳しく説明された、大人にも読みごたえのある作品といえるだろう。

著者は、交通事故や司法問題などをテーマとするノンフィクション作家。地道な取材に裏打ちされた、行動派として活動している。

二〇一〇年暮れの夜、東京都大田区の歩道で青信号待ちしていた、祖父母と二人の男の子の孫、そして一匹の柴犬。そこに突然、大音量のラップ音楽に体を揺らしながら、猛スピードでジグザグ運転を

やなぎはら・みか：一九六三年生まれ。ノンフィクション作家。交通事故、司法問題をテーマに執筆、講演を行う。他の著書に『交通事故鑑定人』『家族のもとへ、あなたを帰す―東日本大震災犠牲者約一万九〇〇〇名、歯科医師たちの身元究明』『巻子の言霊 愛と命を紡いだ、ある夫婦の物語』など多数。

する車が突っ込んだ。

五歳と三歳の幼子は即死と数日後の死亡。祖父母は入院四か月。退院後よりハビリを続けるという大事故となった。

祖父母の家で、お手紙をあげるほど大好きな柴犬マイちゃんと一緒に寝るお泊まりが、楽しみだったといとこ同士。

この日を境に、幼子の両親の、無謀運転に対する憤りと、子供を失った悲しみと喪失感、生き残った祖父母の、孫やその両親に対する罪悪感との闘いが始まり、特に祖母は、心

の病いを併発するほどだった。そして、寄り添うマイちゃんと再生へ向けての日々を送り始めてから二年後、やっと裁判員裁判が開始された。

故意による危険運転致死傷罪で起訴された裁判での判決は、過失とする自動車運転過失致死傷罪で、懲役七年。

加害者は、取調べでの供述は強制とも勾わけ、裁判で証言を翻し、重要な箇所では覚えていないを連発したが、檢察は控訴を断念し刑は確定。

遺族には納得のいかない判決。自分たちのような被害者を二度と出さないためにも、無謀運転に対する法の改正に動き出したという。

交通事故の悲惨さを学ぶ一冊として、子供たちはもちろん、大人たちにも是非読んでもらいたい。